

批評的な読みの交流を通して、個の読みを広げ深めていく子どもの育成

— 中学3年「新美南吉の魅力にせまる」の実践から —

1 単元のねらい

読み比べを行うことで作品の構成や表現の工夫の特徴とその魅力に気付き、それらについて自分の言葉で表現することができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級は学習に対して意欲的な生徒が多く、国語の学習にもとても前向きに取り組んでいる。読書が好きな生徒も多く、毎日の朝読書の時間はもとより、休憩時間にも集中して本を読んでいる生徒も多い。授業中に作品の感想を書かせると自分なりに考えをまとめてワークシートを埋めることはできるものの、それをみんなの前で発表するように求めると、積極的に手を挙げる生徒は少ない。自分の作品のとらえ方や感想に自信をもてない生徒が多いのではないかと思われる。

文学的文章については、2年生の後期に菊池寛の「形」や太宰治の「走れメロス」といった作品を学習してきている。その中で、「形」については他の短編小説との比較から、文章構成や表現上の仕掛けや工夫、その効果とそこに込められた作者の意図などに注目し、作品のもつ魅力について批評文を書くという活動に取り組んだ。以下は、「形」についてある生徒が書いた記録の抜粋である。

【初発の感想】

- ・唐冠纓金のかぶとをかぶるだけで威圧感が出るというのがおもしろい。(生徒A)

【批評文】

- ・この「形」という作品は、ラストの緊張感がとてもうまく表現されていておもしろい。その理由は二つあると思う。一つ目は、80ページの10行目から終盤に近づくにつれて、1文1文の文字数が少なくなっているということである。1文の文字数を少なくすることによって、最初のゆったりとした状況とは違い、新兵衛の心情、そして緊張感をとてもうまく表現していると思う。また、最初にゆったりしたところがあるからこそ、ラストの緊張感が際立ってくるのだと思う。二つ目は、新兵衛の呼び方の変化である。最初の方は「新兵衛」と書かれているのに対し、81ページの2行目の、「……が、彼はともすれば負けそうになった。」からは、「彼」と書かれているのである。このように、呼び方を変化させることで、「形」の無くなった新兵衛の、相手にとっての脅威の変化を示そうとしているのではないかと思う。(生徒A)

この生徒Aの「形」に対する感想は、初読のときも学習を終えたときも共通して「おもしろい」である。しかし、その理由として挙げる内容には大きな変化が見られる。これまでの取組を通して、自分だけでは気付くことができなかった表現の工夫やそれがもつ意味について、見方を広げることができてきていると思われる。また、それらを表す言葉についても少しずつ広がりを感じられるようになってきた。

そこで、これまで培ってきたこの読みの成長を、生徒自身が実感できる機会を設けることによって、自分のとらえ方に自信をもつことができるのではないかと考えた。

(2) 本単元の内容と国語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園国語科では、言葉の学習、特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切にし、よりよい言語生活や社会生活を送ろうとすることのできる子どもの姿を目指している。初読の「読み」を他の学習者の「読み」と照らし合わせながら更新していくことによって「個の読み」が確立されていく。単元の終末に、単なる感想ではなく、各自が根拠を明らかにして価値判断を記した批評文を書き、それを読み合うことで、一人一人の読みを一層深めることが可能となると考え、これまで実践を重ねてきた。

本単元では新美南吉の三つの作品を取り上げ、読み比べることによって、それぞれの作品のよさについて考えるとともに、新美南吉という作家が描く作品世界についても考えさせたい。ここで新美南吉を選んだ理由は二つある。まず一つは、小学生時代に聞いた覚えのあるなじみ深い作家であること。その名前を覚えていないにしても、教科書教材であった「ごん狐」には懐かしさを感じるであろう。他の2作品についても、同じ作者の書いた児童文学であり、長さに多少の差はあるが、抵抗なく作品の世界に入ることが可能である。そして二つ目は、「ごん狐」を学習した当時、うまく説明ができなかったことでも、今ならば自分の言葉で表すことができるということが挙げられる。

一方、批評文を書くという活動については、2年生の秋から取り組んできた。第3学年における「書くこと」と「読むこと」を関連付けた言語活動の例として挙げられているものであるが、第2学年の内容をおさえるためにも有効な手段だと考え、実践してきた。しかし、その有効性についての受け止めは生徒一人一人で個人差が大きかったと思われる。3年生になり、新しい教科書にある『批評』の言葉をためる」は生徒たちにとって大きなヒントになったと思われる。この教材を読んだ感想に次のようなものがあつた。

- ・「批判」と「批評」は違うんだということが分かりました。批評するということは、良いところも悪いところも理由をしっかりとらないとできなくて、それは人によって価値観が違うから、同じものに対してでも同じ批評文を書く人はいないんだろうなと思いました。批評文は、他の人の考えを知ることができて、おもしろいです。(生徒B)
- ・普段、私が会話の中でしていたのは「批評」ではなく「批判」だなと思いました。これからは理由もちゃんと伝えて批評できるようになると良いなと思います。お互いの自己ルールを了解できるようになりたいです。(生徒C)

この他にも、「批判」と「批評」との違いを自分なりにとらえ、その意義を感じ、自らも「批評」できるようになりたいと意欲を感じさせる感想が多かった。今回の単元でも、学習のまとめとして「批評文を書く」ことは、それに向けて細かく読みを進めていくことの動機付けにつながると思われる。これまでの学習で身に付けた力を活かし、自分の成長を実感できる機会としたいと考えた。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本単元でもこれまでのように、まずは初発の感想を書くことから始めたい。過去の学習によって作品を表現を手がかりとして分析的に読むことが少しずつできるようになってきている。しかし、他の生徒の意見を聞くことで初めて気付くことも少なくない。単元終了時に、最初は分

からなかったけど、最後はここまで読めるようになったと、変化を実感させるためにもまずは自分で感じたこと、思ったことを記録させておきたい。

次に作品を各自で読み深めていく際、生徒に考えさせたい登場人物についての描写やせりふとしては、次のような部分が挙げられる。

【ごん狐】

- ・はたけへは行って芋をほりちらしたり……とんがらしをむしりにとって、いったり、いろんなことをしました。
- ・家の中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。
- ・「神さまにお礼をいうんじゃ、おれは、ひきあわないなあ。」

【手袋を買いに】

- ・そのとき、母さん狐の足はすくんでしまいました。
- ・母ちゃん、人間ってちっともこわかないや。
- ・ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。

【牛をつないだ樁の木】

- ・利助さんが、夜おそくまでせっせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。
- ・「けっきょく、ひとはたよりにならんとわかった。いよいよこうなったら、おれひとりの力でやりとげるのだ」
- ・「つまり、わたしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼にもひとしい心になりました。」

これらの表現のもつ意味について、まずは各自で考えをもたせたい。その上で、グループ内の話し合いを行い、それまで自分が意識していなかった見方・考え方に気付かせたい。食い違う意見が出た場合も、どちらが正しいか答を一つに絞るのではなく、視点の違いによって様々な可能性が考えられるということをおさえることで、思考に幅をもたせたい。そして、話し合いの中から新美南吉が読者に伝えようとしたことは何かを考えさせたい。

数多く存在する新美南吉の作品の中で、「ごん狐」は初期の、「手袋を買いに」は中期の代表作と言われる。これらの作品は狐が登場するという共通点をもつとともに、「母」の存在が一つの鍵となる。「ごん狐」に家族はなく「ひとりぼっちの子狐」であるが、兵十に届け物を続けたのは、彼に「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」と共感をもったことと、自分のいたずらのため、母親にうなぎを食べさせることができなかったことを悔やんだためである。その結果、償いを繰り返しているうちに兵十に撃たれるという悲しい結末を迎えるのである。また、「手袋を買いに」では人間に対して興味をもち、親近感さえ感じている「子どもの狐」に対し、「お母さん狐」は最後まで「ほんとうに人間はいいものかしら。」と繰り返す。「子どもの狐」の冒険は成功するが、読み終えた後、胸に何かかが引っかかったような後味の悪さが残る。一方、晩年の代表作と言われる「牛をつないだ樁の木」を見ると、結末が他の2作品と大きく異なるのである。主人公の「人力ひきの海蔵さん」は、通る人みんなが助かるだろうと峠に井戸を掘ろうと思いつく。助けを求めた「牛ひきの利助さん」に断られるが、自分の力で何とかしようと努力して資金を貯める。しかし、次は地主が井戸を掘ることを許可しない……というように困難が続くが、それらを一つ一つ乗り越え、最後には井戸を完成させるというハッピーエンドの形をとるのである。もちろん、この変化には新美南吉自身を取り巻く環境が大きく影響

していると思われるが、そこには触れずに、まずは作品自体と向き合わせたい。同じ作者の作品でも、共通するところもあれば、作品によって描こうとするものも違って面白、そのような思いがきっかけとなり、より深く作品について知りたいという意欲を生徒たちがもってくれるのではないと思われる。また、読み比べを行い、そこから分かったことを班や全体で話し合うことによって、人物像を客観的にとらえたり、物語世界を俯瞰的にとらえたりすることができるといった我々が目指す生徒像に、より近づくことが可能となるのではないかと考えた。学び合いの結果、一人一人の読みがどう変化したかは、初発の感想と単元のまとめとして書く批評文から知ることができると思われる。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	各作品を読み、内容をとらえる。	1 2	<ul style="list-style-type: none"> ・「ごん狐」を通読し、初発の感想を書く。 ・「牛をつないだ樅の木」「手袋を買いに」を通読し、初発の感想を書く。
2	三つの作品を読み比べながら、作品の魅力について考える。	3 4	<ul style="list-style-type: none"> ・表現や仕掛けに注目しながら内容について読み深める。 ◇各作品が書かれた順番について話し合い、作者の思いについて考える。
3	批評文を書き、読み合う。	5	<ul style="list-style-type: none"> ・批評文を書き、互いに鑑賞し合う。

4 授業の実際

(1) 懐かしい作品との再会

今回の単元では、これまで培ってきた読みの力を試すために、一度読んだことのある作品をもう一度読み直してみるということを伝えた後、黒板に「ごん狐」の絵本の表紙を拡大したものを貼った。すると、教室のあちこちから歓声が上がった。「これ、読んだことがある人？」と問うと、ほとんどの生徒が手を挙げた。小学校時代に学習したことがかなり印象強く残っているようである。続いて「手袋を買いに」についても表紙を拡大したものを示すと同じような反応が返ってきた。これも懐かしいと感じる作品のようである。この2作品については抵抗なく読み進めることができた。「牛をつないだ樅の木」についてはほとんどの生徒が知らず、読んだことがあると答えた生徒は1名だけであった。

(2) 作品を分析する

第2次の学習として、各作品を表現や仕掛けに注目しながら読み深めることを行った。その際、生徒たちには次の2点について指導した。

① 行動描写に注目する

作品を読み深めていく上で、今回は作品に描かれている行動描写に着目することを柱として、次のような指示を与えた。

- (i) 注目する登場人物を決めなさい。
- (ii) その人物の行動が分かる部分に線を引きなさい。
- (iii) 線を引いた部分から次のことについて考えて、書けることがあればテキストに書き込みをしなさい。

- | | |
|----------------|------------------|
| ア なぜそうしたのか（理由） | イ その時の気持ち |
| ウ その時の状況 | エ そのようなことをする人の性格 |

線を引く場所が定まらず困っている生徒に対しては、分かりやすいところから一緒に見て何か所か線を引き、判断に困るところはそのままにして次へ進むよう指導した。また、書き込みができず困っている生徒に対しては、ア～エの全てに答えのではなく、どれか書けそうなことについて書けばよいこと、線だけで終わる部分があってもよいことを伝えた。

これは表現されていることが誰の行動であるかはっきりさせるという作業であり、読み取りが苦手な生徒にとっても、比較的取り組みやすい活動である。そして実際に行ってみると、ただ読んでいるだけでは気付かなかったことがいくつか分かってくる。

② 「小説の魅力にせまる10個のヒント」を参考に

次のことが書かれたプリントを資料として生徒に与えた。

「小説に魅力にせまる10個のヒント」				
1, 登場人物	2, 設定	3, 構成	4, 題名	5, 視点
6, 表現技法	7, 工夫	8, 作者と他作品	9, 主題	10, 批評

これは昨年秋に1度使ったものである。これらの項目をもとに、書けるところがあればノートにまとめるよう指示をした。

(3) 「2番目に書かれたのはどれ？」

この分析ノートをもとに三つの作品が書かれた順番について各自で考えさせ、自分の思う順番とそう考えた理由をワークシートに記入させた。第2次の2時間目には、グループごとに自分の考えを発表し合った。なお、このグループは話し合いがスムーズに行われるよう、生活班で行い、司会係・記録係を事前に決めておいた。各グループでの話し合いの結果には次のようなものがあった。

<p>〔1班〕 牛椿→ごん→手袋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オノマトペが増えている。 ・牛椿とごんは内容が似ている。 ・言葉がどんどん現代に近づいている。 ・手袋の人間描写が一番現代に近い。 	<p>〔2班〕 ごん→手袋→牛椿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋、冬、春という季節順になっている。 ・心情の変化が広がっている。
<p>〔5班〕 牛椿→手袋→ごん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人と動物の関わりの変化。 ・内容が濃くなってくる。 ・優しく素直な主人公。 	<p>〔6班〕 ごん→手袋→牛椿 牛椿→手袋→ごん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時代順。 ・終わり方がハッピーエンド。

この単元のまとめとして書いた批評文には次のようなものが見られた。

<p>・……私がこの物語を読んで思ったことは、この物語に出てくる二匹の狐の心情は、南吉そのものではないかということだ。子狐は「人間はいいもの」と言っていることに対して、お母さん狐は「ほんとうに人間はいいものかしら」と言っていることから、南吉は人間を少し疑っているのではないかと思った。私は、南吉は自分が両親からもらうはずだった愛情を、物語という形にして親子の狐に託したのではないかと思った。(生徒D)</p>
--

- ……この話には亡くなりそうな老人が出てきます。老人は海蔵さんのおかげで人のことも考える良い人になります。南吉もこの老人と同じです。自分が死ぬ前に、人間を信じられるようになり、人間はいいものだということに気付いたんだと思います。これらのことから、新美南吉の作品は、「人間はいいものか」という疑問から、「人間はいいものだ」という考え方に変化していると思います。(生徒E)

このように作者のその時の心情や、心境の変化についても思いをめぐらせた生徒も少なくなかった。一方、単元の最初の段階ではあまり詳しく感想をまとめることのできなかつた生徒もいたが、今回の学習を通して作品の見方に成長の跡が見られるようになったものも現れた。

- ……この作品を読んで、人間が優しくて子狐が間違えて出した手の方でも捕まえたりしなかったのでもっとしました。(生徒F・初発の感想)
- ↓
- ……一つ目に色彩豊かな表現です。子狐が帽子屋を探している場面では、黒い看板や青い電灯などの表現が出てきて、読者が想像しやすいような工夫がされていると思います。二つ目に対比です。人間をおそろしいものだと考えている親狐と子狐や、赤・黄・青などの町の灯の対比がありました。作者は対比を作ることで親子同士の中にある考え方の違いやほんとうに人間はおそろしいものなのかという疑問を表現したかったのだと思います。三つ目に比喩表現です。戸をたたく音や……。 (生徒F・批評文の一部)

この生徒のように、初発の感想では「懐かしい」「かわいそう」という印象を述べることで終わっていた生徒の内、76%が三つ以上の理由を挙げて批評文を書くことができるようになっていた。また、作中の登場人物だけでなく、新美南吉の人柄や生き方についてもふれている生徒が全体4割近くいた。これは、作品を読むことを通して、その背景にある人物の在り方にも意識を向けるようになったということであり、読みの成長の一つであると言える。

5 成果と課題

成果としては、作品が書かれた順番を理由付けるために、生徒一人一人が作品に向き合い、その構成や表現の工夫などについて深く考えたこと、また、互いの意見を交換し合うことで自分の気付かなかったことを発見したり、見方や考え方を広げることができたことが挙げられる。これまでの学習で学んだことが実際の作品の中でどう生かされているか考えることができた。また、そのような読み取りができるようになったと一人一人が実感し、自分の成長を感じるよい機会となった。

一方、課題としては話し合いの在り方が挙げられる。今回は柱となる枠組みを特に設けず、各自が発見したことを発表しようというかたちで行ったところ、グループ内での話し合いは盛り上がったものの、その後の全体での発表は単なる報告会になり、それ以上の深まりを生む話し合いとはならなかった。各グループが挙げた理由を見ると、作品に描かれた時代設定など、理由としてふさわしくないものもあった。これを自分たちで指摘し合えるようにするには、何について話し合うのか、話し合いの必然性を生む枠組みの設定と、掘り下げの具体的はたらきかけが重要であると思われる。また、この単元では読むことに力を入れたため、まとめとして行った批評文を書く活動に十分時間をかけることができなかった。授業者はここで生徒にどのような力をつけさせたいのかきちんととらえ、生徒の活動を吟味していく必要があると感じた。

(文責 永野 信吾)